

者はたまりません。先日もごはんの時間がいつもよりちょっと遅れたところ、「計画が狂った。今ごろから食べたら勉強が間にあわない。どうしてくれる」とわめき出し、何とかなだめて食べさせようとすると、「こんなもの食えるか」とお皿をひっくり返してしまいました。そしてその翌日、今度は自分の頭髮がどういうわけかこのごろ天然パーマになってきたのを気にして、「元のようなまっすぐな髪に今すぐ直せ」と大騒ぎをし、「そんなこと出来るわけないでしょう」と無理難題を取りあわなんでいると、「お前がこんな髪の毛に生んでおいて、責任もとらずに何だ!!」といきなりお母さんになぐりかかったのです。こんな時逃げようとしたり、涙を流したりするとそれにまた刺激されて、乱暴は募るだけなので、お母さんも家族の者もじっと彼の怒りが収まるのを待つ以外に方法がみあたらないということです。

• 学校では従順で大人しい優等生

不思議な事に、彼はその前日どんなに荒れて家族の者

に被害を与えても、朝になると何事もなかったかのような顔をして学校へ行くのです。しかし自分から仕度をしてというのではなく、起きる事から始めてすべてがお母さんまかせの状態です。お母さんはまるで王様にかしづく下僕のように一郎君に仕える毎日ですが、それらも、虫のいどころが悪いと、いつ怒りが爆発するかもわからず戦々きょうくとしています。門の所で見送るお母さんに、彼は何度も後を振り返りつつ登校するのですが、角を曲るとそこから先は別人のように顔の表情が変わり普通の中学生の顔になるようです。担任の先生に家での様子をお話ししても、とても信じられないとのこと。中学に入ってから今まで三人の先生に担任されましたが、どの先生も彼をほめることはあっても、家での乱暴狼藉は想像も出来ないと言うので、お母さんは我が子ながら彼をどう理解したらよいのかわからなくなると悩んでしまいました。

• ききわけのよい手のかからない子だった

一郎君の両親はたいへん物静かなやさしい人たちで、今まで子どもに手をあげたり、声を荒げて叱ったりした事は一度もないとのことでした。彼が幼い頃、多少いたずらをするがあつても、言葉でやさしく言つてきかせるとわかる子だったので、その必要がなかったといひます。近ごろよく言われる、いわゆる三歳頃の第一反抗期のない、ききわけのよい子の典型だったようです。ですから中学生になつて些細な刺激でイライラし、形相を変えて迫ってくる彼は、気が狂つてしまつたのではないかと心配でたまりません。

・喜怒哀楽の感情を育てる

ききわけのよい、物静かな子、それは親にとつて手のかからない育てやすい子かもしれませんが、本来、子どもは自分の喜怒哀楽の感情を素直に表現してこそ子どもらしいといえます。しかし近頃相談室にいて気になることの一つに、こうした感情がきちんと分化して発達してないのではないかと思われる子どもに時々出会うこと

です。自分が今うれいいのか、悲しいのか、怒っているのか、楽しいのかわからない子どもたち。「どう思う？」とたずねても「べつにいい」と投げやりな返事しかもたない子どもたち。

人間は三か月で快・不快の感情が生じ、六か月で怒り・嫌悪・恐れが、一歳で愛情が芽生える（ブリッジ）と言われていますが、こうした感情は本能として自然発生してくるものではなく、家族や友だちといった人間関係の中で学習し、次第に身につけていくものだということを強く感じさせられています。

一郎君の家庭でいうならば、不快な感情を育て、それをコントロールする力を学習する機会の少ない家族だったように思われます。さらにストーが指摘したように、人間の攻撃心は、向上心・知識欲の原動でもあるとの見方をすれば、まさに一郎君は受験という困難にぶつかつて、攻撃心のマイナスの面がようやく解_レ発_レされた段階（生後六か月）で、プラスの面の発達はまだまだ先の事かもしれません。

事例2 トラブルメーカーの終息

小学校四年の二郎君は、小さい時から奇想天外ないたずらが絶えず、両親は片時も気が抜けません。たとえば彼が幼稚園の時、自宅の塀ぎわに止めてあった車が、足場にちょうどよいと、ボンネットから屋根に登って塀に乗り、どの位遠くまで飛べるか競争をして車をへこませてしまったり、小学校に入ってマッチが使えるようになってとうれしさと面白さから「マッチ、マッチ」とマッチの虜になった時がありました。お母さんに見つかるマッパチを取りあげられるので、彼としては隠れてやったつもりが、押入れであわや火事にと大騒ぎになったり、彼がハイハイを始めてからというもの、いつも目が放せない気持ですと今日までできてしまいました。

・心配が口やかましさに

こんな二郎君ですから、両親は彼が何かをしようとするときまだ何もしないうちに「気をつけてね」「人に迷惑

をかけないようにね」という注意がつい口から出てしまうということですよ。

このごろの彼はこうした両親の目がわずらわしく、日々監視されているような気がして気持よくありません。この間も学校の工作の宿題でカッターを使っていたところ、勢いが余って机に傷をつけてしまいました。自分でも内心「しまった。どうしよう」と思っていた所へお母さんの一言がとんできたのが火に油を注ぐ結果となったようです。この時の彼はいつになくはっきりした声で、「わざとやったんじゃない。お母さんはどうして僕のことを一々見ている何か言うの。そんなに見ているから失敗しなくてもいいのに失敗しちゃうんだ」と抗議を始め、いきなり手にしていたカッターで襖をズタズタに切ってしまいました。

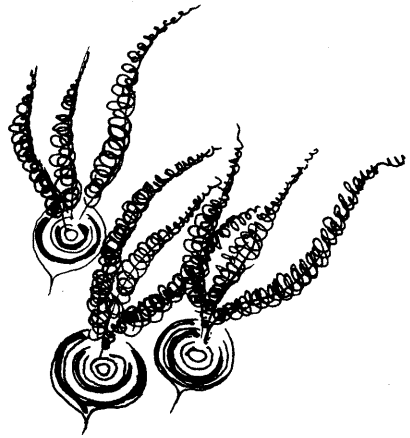
事ここに及んでお母さんは、もうこの子は私の手に負えない」と相談する気になったようでした。

・騙さなくても真実は見抜かれている

知能テストをするとの理由で連れて来られた二郎君は、いきなり玩具がいっぱいある遊戯室という所へ案内されてびっくりしたようでした。そんないきさつを知らない担当者は初めての出会いでもあることから、彼を自由に遊ばせて、様子を見る（観察）つもりでいたのですが、時間の半分以上を過ぎる頃から彼が妙にソワソワと始めました。何事かと思つて、「どうしたの？」とたずねると待つていたかのように「ねえ知能テストしないの？」というのです。驚いた担当者が「どうして？」と聞いて初めて彼の来談の目的がわかったのですが、「やつてほしい？」と聞くと「ううん」と否定するのです。「それともやらないと後でお母さんに叱られるかな」と言う、「うん」とのこと。そこで「ここは遊びに来る人がいやがる事はしないよ。お母さんが何か言ったら、私がお母さんに言ってあげる」とまず彼を安心させることだと思ひました。この日は知能テストといわれてひどく緊張して来談したであろうのに、実にアイデアに富んだ遊びを工夫する彼に感心していた事を伝えると、彼の

顔がパツと輝いたのです。「だから私は知能テストをする必要はないと思う」ということを彼に伝える一方、「でもお母さんはどうして君をここへ連れて来たんだらう」と尋ねると、「それは僕があんまりお母さんの言うこときかないからじゃない？」とのこと。この一言を聞いて、私はまたぐどんなに幼い子供でもその子なりに自分をとりまいてる世界の本質を見抜いている」というある精神科医の言葉を思い出しました。ですから彼のお母さんも知能テストなどと嘘をつかず、お母さんとして困っていることを単刀直入に伝える方法もあつたかと思われます。

・自分を受け入れ理解してくれる人の言うことは大きく
二郎君は相談室がたいへん気に入るその後10回ほど通つてきたのですが、一緒に遊ぶうちに、あまり突飛な行動をしなくなりました。はじめのうちには既成概念にとらわれない柔軟な発想が出来る子と、担当者は多少買ひ被つていたようですが、落ち着きが出てくるようになって



て、「こんなことをしたらお母さんはどの位騒ぎ立てるだろうか」といった大人をためす気持が、無意識のうちには作動していたようにも思われました。

一方お母さんは、ただ遊びに来ているだけなのに彼が変化していくことが不思議でなりませんでした。何とか彼の口からどうしてそんなに相談室が好きなのか聞き出そうとするのですが、彼の返事は今一つはつきりしません。

ところがある日、彼が小さい時から大好きな母親の妹が遊びに来た時、彼が思わず言った一言、「相談室の先生、おばちゃんに似ているんだよ」を聞いてハッと思い当たったといいます。というのは彼がやたらと火遊びをして困った時、親がいくら注意しても効果がなかったのに、このおばちゃんが彼に火事の恐ろしさをゼスチュアたっぷりと言いきかせたところ、その後マッチを持ち出さなくなったことを思い出したのです。その時は今ほど

はっきりおばちゃん功績とは意識できませんでしたが、この彼の一言で何もかも納得できたとのことでした。そこでお母さんは、彼が小さい時からの自分と妹の違いを比較してみると不思議なことに自分の言うことはなかなかきかないのに、妹の言うことは聞き入れていることがたくさん出てきて、お母さんにはいささかショックなことでした。そして自分と妹の一番の違いは自分を彼を常識の枠からはみ出た困った子と思っているのに対して、妹は発想が自由で面白い子として肯定的に見ていることだと気づいたのです。

こうして二郎君のお母さんは、子供というものは自分を認めてくれる人の言うことはきくものなんだというのを学んだといつて相談を卒業していきました。

事例三 母親への乱暴は父親ゆずり

太郎君のお父さんは彼が小学校一年生の頃から家をおけるようになり、このごろでは月に一回お母さんからお金を奪いに帰ってくるだけの生活です。家族の生活費を

くれるどころか逆に浮気に注ぎ込むお金など渡す必要がないとお母さんは思っているのですが、アパートの現金収入があることを知っているお父さんは、お母さんになぐるけるの暴力をふるってでも取ってしまってししまうのです。こういう生活をずっと見続けて大きくなった太郎君は、お父さんに対しては憎しみに近い気持の反面、いなりになっているお母さんに対しても腹が立つといま

・中卒のお母さんと大卒のお父さん

お母さんは元々は大きな地主の一人娘なのですが、ちょうど高校進学の頃病気をし、そのまま進学を断念しておじいさんの農業を手伝っていました。お父さんはうだつのあがらない三男坊として田舎で埋もれてしまうよりはと東京に出てきたものの、アパート暮らしにも事欠く苦学生だったところをおじいさんに助けられたのが縁でお母さんと結ばれたということです。ところが学費も生活もすべてが丸かかえて面倒をみてくれた大恩あるおじ

いさんが亡くなると、お父さんは待ち構えていたかのよう
に浮気を始めました。

・羅針盤のない別世界にとび込んで墜落

こうした中で太郎君はお母さんからひたすら有名私立
中学に入ることだけを期待され、小学校の四年生以来進
学塾の他に二人の家庭教師をつけられて競争馬のように
受験勉強に追い立てられた生活をしてきました。この春
ようやく念願の中学に入れたのですが、入ってみるとび
っくりすることだらけで自分でもどうしてよいかわから
なくなりそうでした。勉強は皆よく出来るし、今時、中
卒のお母さんなどという人は一人もいません。そしてお
父さんの職業というと医者とか弁護士とかが多く、これ
まで彼が接してきた友だちとはまるで違うのです。

・学校での劣等感が家での暴力に

合格した喜びを味わう間もなく、自分の一つ一つが引
け目として感じられ、学校へ行くほどに絶望感が膨張し

ていくようでした。たまれない毎日です。

そんな彼の気持ちを知らないお母さんは相かわらず彼
に期待を寄せ、勉強勉強と彼を煽り立てるのですが、彼
はとても勉強どころではありません。

勉強が思うようにはかどらずイライラした時など、お
母さんに対して「ウルセエ、このクソババア」など悪態
をついたり、そこらへんにある物を投げてガラスを割っ
てしまったりしたことが小学校の時にもたまにあったの
ですが、先日の期末テストで学年の最低だったと先生に
注意されて帰った日はたいへんでした。「あんな学校へ
入れやがって」とお母さんに初めてなぐりかかり、驚い
たお母さんが急いでお父さんに電話をして来てもらった
ところ、こんどはお父さんに向かって「今更、父親面を
して何だ」と胸ぐらをつかんでなぐりかかって前歯を二
本折ってしまったのです。

・彼こそが「家」の改革者

そこで彼が泣く泣く訴えたことは、もう学校も家も何

もかもしやになったこと。お父さんもお母さんもこれ以上今のような状態を続けないで、別れるなら別れるとはつきりしてほしいこと。今のままの状態を続けるなら暴力で徹底的にこの家も家族も破壊することなどでした。

・男性のよいモデルを得て快方に

両親の問題は簡単ではありませんが、お母さんと話し合いを重ね、結局彼は公立の中学に戻ることになりました。そして男性のよいモデルを示すことを目的に、彼は勉強の遅れを取り戻すという名目でお兄さん役の大学生を家庭教師として送り込むことにしました。今までの家庭教師に比べて、二浪をして念願の大学に入ったという青年に、彼ははじめ「二浪？そんなバカに金を払うことない！」と会おうともしませんでした。しかし「そうなんだよなあ。やっぱ二浪はきつかった……」と悲びれもせず、また隠そうともせずを受けとめる青年に彼は重ねてイヤ味を言いつのるのでした。「今度も失敗するかもしれないかった」「また落ちてたら」……とやたらに

「失敗」「失敗」とくり返し、青年がいつ怒り出すか試しているようにも受けとれました。結局その日は自室から出てきませんでしたので、彼は青年にドア越しに言いたい放題で終わりましたが、青年が帰ってから、「世の中には変わった人間もいるものだ。いくら怒らそうとしても怒らない奴がいる。あれは何者だ」と場合によっては会ってもよい様子をみせました。

以来彼は、物心ついてから初めて触れる健康な男性として青年をモデルにし、兄のように慕う中で、父親に見続けてきた、攻撃心を暴発する悪いモデルからの転換を果たしつつあるように思われます。

以上三つの事例はいずれも家庭内暴力ということでも来談した事例です。一口に家庭内暴力といっても、その成り立ちや意味するものが異なることはお分かりのことと思えます。

しかし三人に共通する事は、自分の感情、特に攻撃性をコントロールする能力が年齢相応に機能していないと

ということのようです。

事例1の一郎君の場合には、不快な感情の発達遅滞が思春期まで持ち越され、受験を目前にして、攻撃性と共に爆発的に発露された例といえます。

それに対して事例2の二郎君は喜怒哀楽のある子どもですが、いわゆるしつけのしにくい子どもの例としてとりあげました。もしかして本題に掲げた感情のコントロールの問題ではなく、超自我の形成の問題かもしれません。二郎君の場合のごく幼い時期に母と子の間のしつけの歯車がかみあわなくなり、超自我が育ちにくい関係の中で、反抗期が同年齢の子供に比べて促進され暴力となって現われたかと思われまます。

事例3では目的達成のためには手段を選ばず母親に乱暴をする父親に反発しながらも、初めての挫折を経験して、父親の轍を踏んでいった例です。その後彼の本当の苦しみは、自分がかつてあれほど憎んでいた父親と同じ人間だったということ、つまり父親の血が自分の中を流れているという恐れでした。

思春期は自分の生についても両親に問いかける時期でもあり、太郎君の場合は単に感情の調整の学習以上に深刻な問題を整理しなければなりません。今回は暴力の意味については触れませんでした。家庭内暴力事例に取り組む時には、太郎君の例に示すように暴力によって彼らが何を訴え、どのように整理しようとしているが、それを理解する視点も大切なことを申し添えて今回の稿を終わります。

(東京都立教育研究所)